

『戦火のシンフォニー』

2014年10月02日

3・11の「同時多発テロ」後、音楽家の坂本龍一氏が音楽は平和のために貢献できるの
であろうかと、悲観的な響きで書いていた。ひのまどか氏が著した『戦火のシンフォニー
レニングラード封鎖345日の真実』は、音楽が人に勇気を与え、平和を生み出す大きな力
であることを見事に表している。感動して一気に読んだ。

ひの氏はヴァイオリニストとして活躍していたが、作曲家の伝記や小説、音楽解説など
の執筆活動をされ、20巻の『作曲家の物語』シリーズの内、19巻を書いている。彼女はこ
の本を書くために、ロシア語を初歩から学んだという。思い入れの深さが分かる。レニ
ングラード（サンクト・ペテルブルグの旧称）に足を運び、多くの人々にインタビューをし
ている。

ドイツとソ連の間には「独ソ不可侵条約」が結ばれていた。しかし、ヒトラーはソ連に
侵攻してきた。レニングラードはドイツ軍によって封鎖され、猛爆に晒された。猛爆に耐
えながら、音楽を愛する人々はコンサート、オペレッタ、ミュージカル、バレエなどの演
奏会を開き、市民は喜び、楽しんだというから驚きである。ドイツは「レニングラードは
陥落した」とプロパガンダを流す。対抗して、健在であることを知らせるために、オーケ
ストラを編成し、チャイコフスキー、敵国人であるベートーヴェンなどの交響曲を電波で
イギリスに送り、スピーカーでレニングラード市民、敵のドイツ軍にも聞かせた。現実
は、爆撃によって、街は破壊され、死傷者は続出し、食料不足に苦しむ最中であったが、音楽
を止めることはなかった。ショスタコーヴィッチは、砲弾の音を聞きながらレニングラ
ードの苦難の現状を「交響曲第7番」に書き続けていた。長く封鎖されたレニングラードは
食料難に苦しみ、人肉を食べるほどになった。餓死と凍死者が続出し、埋葬できない状態
に追い込まれ、さすがにラジオの音楽放送も途絶えた。ロシアの諺通り「大砲が鳴る時、
ミュージズは黙る」である。

時は流れ、ドイツ軍はソビエトの「冬将軍」に見舞われ、弱体化していく。レニングラ
ードに食料が少しずつ運び込まれてくる。音楽を愛する人々は、栄養失調でもなんとか歩
ける生き残った仲間を集め、献身的に支え合って音楽の再開を目指す。そして、ショスタ
コーヴィッチの「交響曲7番」のコンサートをしようとして計画する。スコアを見ると、大編
成の曲である。半分くらいのメンバーしかいない。そこで、ソビエト軍に音楽経験者、軍
の音楽隊に応援を依頼した。この緊迫している時に音楽などと反対されるが、軍は求めに
応じたというから驚きである。彼らは楽譜を手書きで写し、猛特訓し、大曲を仕上げてい
く。ショスタコーヴィッチがレニングラードに捧げた「交響曲7番」は1942年8月9日、
900日間の封鎖と猛爆の中、345日目に初演された。市民は自分たちが経験した苦難と鎮魂
と希望を重ね合わせて、大歓喜をもって聴いた。「大砲が鳴る時、ミュージズは黙る」を覆
し「しかし、ミュージズは黙らなかった」を実践した。

ひの氏は最後に「一つの音楽作品が、これほど巨大な歴史的、政治的、社会的背景を持
って生まれ、その演奏が、これほど膨大な人間ドラマを生んだ例を、私は知らない」と結
んでいる。「交響曲7番」はナチズム攻撃下で作られたが、スターリンの「血の粛清」が
深く念頭にあったとも言われている。早速、CDを買って聴いた。1時間半近い大曲であ
る。音楽は人間賛歌、平和への深いメッセージを持っていることを知らされた。